

三重大学日本人学生と留学生の地域での交流活動報告

福岡 昌子 ・ 藤本 久司 ・ 別府 直苗

Report on Exchange Activity among Mie University Japanese Students, International Students and Local Community Members

FUKUOKA Masako ・ FUJIMOTO Hisashi ・ BEPPU Naoi

〈Abstract〉

This report discusses two opportunities for Mie University students, including international students, to work with local community members. The events were designed and put into practice by a volunteer-based organization that supports international students while studying Japanese at Mie University. The events took place in Ise and Iga in 2004 and were financed by The Fund for International Friendship and Exchange. The community members who participated, even in minor roles, had unexpected and invaluable experiences; students discovered new meanings of their own values and gained a deeper understanding of international exchange. It is hoped that the university will continue to provide pedagogic and financial support as all participants look toward the future, growing and developing a sense of self-awareness in conjunction with a global outlook.

キーワード：多文化、主体性、地域、ボランティア、協力、助成

1. はじめに

三重大学国際交流基金は国際交流関連の取り組みに関する助成金であり、①国際教育プログラム、国際インターンシップに参画すること、②国際的感覚を持った人材育成を推進すること、③学内における国際化を図ること、④グローバルな問題の国際共同研究を企画すること、⑤地域における国際交流に貢献すること、の5つのいずれかを目的とする企画を対象に交付されている。助成対象者は三重大学所属の教員・院生・学生である。しかし、過去に院生・学生からの申請が極めて少ないことから、平成16年度は同基金では特別に学生枠を設け、院生・学生の優良な企画に助成金が交付されることとなった。

その結果、留学生対象の日本語学習サポート・ボランティアサークル「てらこや」メンバーからいずれも上記基金の目的の②及び⑤に該当する2つの申請が出され認められた。テーマは「古代文化交流と現代の異文化交流—伊勢研修」と「伊賀の外国人青年と三重大

学学生・留学生との交流会」である。ここでは 2 つの企画の報告とともに、それぞれの企画が留学生を含む日本人学生にどういう効果や学習をもたらしたか、を中心にまとめておきたい。

2. 伊勢研修：「古代文化交流と現代の異文化交流」

2-1. 内容

- ① 目的：留学生と日本人学生合同で、伊勢神宮、おかげ横町を見学し、三重の文化と歴史を学ぶ。さらに、伊勢日本語教室の日本語サポートボランティアおよび在住外国人との相互交流を行う。
- ② 概要：留学生と、留学生に日本語学習支援を行なっている日本人学生が、共に日本の歴史的文化財である伊勢神宮（内宮）、昔ながらの街並みを再現したおかげ横町を見学し、日本の歴史・文化に触れる。また、伊勢市福祉健康センターでは、三重県、JICA 中部主催の国際協力キャラバン in 伊勢志摩 2004 に参加し、地域の外国人や日本人と交流を行う。
- ③ 当日の日程：午前 9 時 三重大学出発（バス 1 台）
午前 10 時～ 伊勢神宮内宮・おかげ横丁見学
午後 12 時 30 分～「国際協力キャラバン in 伊勢志摩 2004」参加
午後 4 時 30 分 伊勢市出発
午後 6 時 三重大学到着
- ④ 参加者内訳：日本人学生 26 名、留学生 24 名（中国 22 名、韓国 1 名、フランス 1 名）、三重大学教員 2 名。計 53 名
- ⑤ 経過：
2004 年 9 月 1 日 国際交流課へ申請書提出
9 月 10 日 伊勢日本語教室の代表（市橋氏）と打ち合わせ（於：伊勢市役所）
10 月上旬 学生実行委員決定
10 月 20 日～29 日 参加者募集
10 月 31 日 実行委員会
参加人数把握、当日役割、アンケート作成、国際協力キャラバンへの参加人数（国籍）の報告
11 月上旬 参加者ネームプレート、パンフレットの仕分け
11 月 14 日 研修旅行実施
- ⑥ 実行委員⁽¹⁾：廣田知加子（人文・2 年）、榊原円（人文・2 年）、城小百合（人文・2

年)、花井有里(人文・2年)、東出尚之(人文・3年)、高山宜大(生物資源・2年)、包雲飛(人文・3年)、シャルル・ベルトラン(人文・交換留学生)

2-2. 成果

- i) 伊勢神宮参拝、おかげ横丁見学を通して、留学生にとっては日本文化と慣れ親しむことができた。また、日本人学生にとっては更なる日本文化・歴史への理解を深めることができた。
- ii) 実行委員として日本人学生ばかりでなく、留学生も参加し、共に準備をしたことで、相互に理解を深め合うことができた。
- iii) 昨今、外国人住民の増加に伴い、ボランティアによる日本語教室が三重県の各地で開かれている。本サークルは日本語教室ではないが、日本語学習サポートを希望する留学生に対して、一対一、もしくは一対二で日本語のサポートを行っている。地域のボランティアの人たちは、同じような活動を行っているにも関わらず、互いの学習支援の方法や悩みなどについて直接会って話をするような機会がなかったので、このような交流を実施することで、ボランティアの立場から在住外国人及び留学生支援のあり方について認識を深め合うことができた。また、学生は学内の活動には積極的だが、学外の団体と協力して地域イベントに参加し、何か一つのことをやり遂げるといったことは、初めての試みであるため、この交流をきっかけとして、地域のさまざまな問題や活動に目を向けるようになるのではないかとと思われる。

2-3. 感想、意見等

① 日本人学生の感想：実行委員2名

私にとって伊勢への日帰り旅行は、留学生と一日過ごす初めての体験だった。伊勢神宮の見学や国際協力キャラバンへの参加を通して、学内では経験できない異文化交流ができたと思う。

伊勢神宮では、観光ボランティアの方の説明を聞き、日本人であるが日本の文化や歴史の知識のなさを感じ、また、中国の留学生が中国の寺院や自然について話をしてくれた。国際協力キャラバンでは、海外でボランティア活動を行っている方の話を聞き、海外での活動に対し身近な印象を受け、やりがいがあり、実際に活動している方は楽しんでいることがわかった。

今まで、真剣に留学生と国際協力や国際貢献について話したことがなかったので、

留学生は日本人がボランティア活動に積極的でうれしい、ということを知り、日本人としてうれしい反面、日本人全員が積極的ではなく、一部の日本人の行為が感謝されているんだとも感じた。また、この日帰り旅行では留学生だけでなく、地域のボランティアの方とも交流ができ、よい経験ができた。 廣田知加子（人文学部 2 年）

サークルのメンバーである日本人と、そのサポート相手である留学生を中心に、総勢 50 名程で伊勢研修旅行に行った。午前中は伊勢神宮（内宮）の見物をし、午後からは JICA が主催する「国際協力キャラバン in 伊勢志摩」に参加させていただいた。

内宮では、日本語・英語・中国語でのガイドを依頼した。積極的に質問をする留学生の姿も見受けられ、留学生にとっても、また日本人学生にとっても、日本の文化理解を深める良い機会となった。

国際協力キャラバンでは、伊勢日本語教室の方々にとても親切にして頂き、餅つきに参加したり、和太鼓を教えていただいたり、JICA のメンバーの講演を拝聴したりと、あっという間だったが、内容の濃い時間を過ごせた。留学生にとっては餅つきと和太鼓の体験が最も印象に残ったようだった。

助成金が頂けたことで参加費を抑えられ、多くの留学生に参加してもらえた。普段の日本語を教えるという活動だけでは実感できない日本の文化を少しでも感じてもらえた貴重な研修旅行であったと思う。 榊原 円（人文学部 3 年）

② 参加者へのアンケートから

●留学生：質問と回答

1) 研修旅行に参加して、印象に残ったことはなんですか。

- ・日本の方々が非常に熱心に国際協力キャラバンに参加し、困っている人々を手伝っていることに感動した。
- ・国際協力キャラバンに参加した際の、日本の文化である太鼓を叩くことが出来たことと、餅つきを体験できたこと。
- ・伊勢神宮に行き、日本の文化に触れられたこと。

2) 反省点・改善点・何か気づいたこと。

- ・講演の話が早かったので、日本語で話すとき、もう少しゆっくり話して欲しい。
- ・伊勢神宮は広いので、見学する時間がもう少し欲しかった。
- ・今回の、伊勢研修旅行は有意義な活動だと思う。

3) JICA（日本国際協力事業団）の講演を聴いて思ったことを自由に書いてください。

- ・日本は外国の生活に困った人達を援助していて、中国でも日本の援助を受けた。
- ・援助を受けた人は、生活水準が高くなっていていいことだと思う。
- ・感動した。自分は日中友好と両国人民の相互理解に役立てばいいと思う。
- ・ボランティア活動および国際協力の紹介を見て、日本の国際協力行動は世界友情の意義と価値があると思う。
- ・NPO の方の講演を聞いて感動した。自分でも何かしたいと思った。

●日本人学生への質問と回答

1) 研修旅行に参加して、印象に残ったことはなんですか。

- ・留学生と一緒に伊勢神宮に行けたこと。
- ・国境を越えて困っている人を助けるボランティアをしている人たちの広い心意気。
- ・太鼓や餅つきといった日本文化を経験する時間に留学生と楽しく参加できたこと。

2) 反省点・改善点・何か気づいたこと。

- ・午前中のスケジュール（伊勢神宮見学）は時間が足りなかった。
- ・留学生の人たちと何処かに行くことは貴重な経験だと思う。
- ・国際協力キャラバンの時に、いろいろな人達と話し合える時間がもう少し欲しかった。

3) JICA（日本国際協力事業団）の講演を聴いて思ったことを自由に書いてください。

- ・講演会の内容が難しすぎて、留学生が正確に理解できているかどうか不安だった。
- ・直接ボランティアの方々の話が聞けたので、国際協力や異文化理解の重要性を痛感した。
- ・困っている人を助けたいという気持ちには国境なんてないと思った。世界中には多くの人がいて、様々な生活を送っていることを改めて思った。
- ・やりたいと思うだけではなく、やることの大切さを考えさせられた。講演者はやりがいを感じていることが分かり、立派に思えた。
- ・前から NGO などに関心があって、やってみたいと思っているので興味深く話が聞けた。
- ・身近なことからやってみて、いつかは実際に外国で支援したいと思った。

3. 伊賀上野一泊研修：「伊賀の外国人青年と三重大学学生・留学生との交流会」

2-1. 内容

- ① 目的：日本人学生と留学生、在住外国人など、若い世代同士の自主的かつ自由な話し合いと交流会によって、これからの多文化共生を支える青年たちがいかに国や立場を越えて相互に理解しあうか考える。
- ② 概要：宿泊と交流イベントの場所は上野高校の協力によりセミナーハウスで行った。企画の詳細や経過は下記の通りである。企画実施は「てらこや」に所属する学生と留学生が中心で、現地スタッフの紹介や諸手続き等に関して必要な部分のみ顧問教員も関わった。
- ③ 当日の日程：1日目（12.11）
 - 第1日目……午後 1時 三重大学出発（バス1台）
 - 午後 3時～ 伊賀に残る文化施設（伊賀忍者屋敷、上野城、上野の町並み）の見学
 - 午後 5時 上野高校セミナーハウス到着、夕食
 - 午後 7時～ 外国人に関する研修
 - 午後 7時30分～「伊賀日本語の会」の授業（日本語クラス）見学と
銭湯体験 宿泊
 - 第2日目……午前 10時～ ショートスピーチ「日本と母国の違い」
 - 午後 12時～ 三重大学日本人学生、三重大学留学生、伊賀市在住の
外国人の若者によるグループ別話し合い（日本語）
 - 午後 1時～ フォルクローレ⁽²⁾の演奏
 - 午後 2時～ 昼食交流会
 - 午後 4時 解散
 - 午後 4時20分 伊賀出発
 - 午後 5時20分 三重大学到着
- ④ 参加者内訳：日本人学生 13名、留学生 9名（中国 5、フランス 1、カナダ 1、スリランカ 1、コロンビア 1）、伊賀上野在住外国人 19名（カナダ 1、南アフリカ 1、イギリス 1、ブラジル 3、ペルー 8、インドネシア 5）、伊賀上野の日本人 3名、三重大学教員 2名。計 46名

⑤ 経過：

2004 年 9 月 1 日 国際交流課へ申請書提出

10 月上旬 学生実行委員決定

10 月 14 日 第 1 回実行委員会

実施日程の決定

10 月 24 日 実行委員による現地の下見

11 月 13 日 三重大大学人文学部にて伊賀のボランティア 1 名と打ち合わせ

11 月 16 日 実施内容、場所決定

(宿泊と交流会場の上野高校教頭と連絡。バス会社連絡。各訪問地への提出文書、チラシ・申込書作成。話し合いのスタイル、テーマや食事献立、演奏など交流内容の計画、現地連絡など)

11 月 17 日～30 日 参加者募集。

11 月 25 日 実行委員による第 2 回目の現地下見兼打ち合わせ

11 月 26 日 参加者に対する注意事項作成

12 月上旬 参加人数確認、当日役割分担、参加者ネームプレート・アンケート作成

12 月 11 日～12 日 研修旅行実施

- ⑥ 実行委員：内山勝治（人文・4 年）、長田真太郎（生物資源・3 年）、笹野元（医・3 年）、高野愛（教育・2 年）、木下詩菜（生物資源・1 年）、竹村美耶（生物資源・1 年）、村田佳美（生物資源・1 年）、清家亜弓（教育・1 年）

3-2. 成果：

- i) 忍者屋敷、上野城、上野の町並み等の見学を通して、日本人学生、留学生ともに日本の歴史・文化への理解を深めることができた。特に、留学生にとって忍者屋敷における特別パフォーマンスは好評であった。
- ii) 留学生と在住外国人青年 9 カ国の代表による「日本と母国の違い」というショートスピーチによって文化や習慣等の相違がかなりリアルに感得できたこと、また、グループ別話し合いによって、国と国の関係が身近に感じられ、文化的相違にも共感できたことなど、異文化に対する理解がより深まった。
- iii) 演奏・歌唱・ダンス・昼食交流会等の企画も参加者をリラックスさせ、楽しむことができて、評判がよかった。フォルクローレの演奏を鑑賞し、全員で歌を歌い、ダンスをして、おいしい料理を食べるといった楽しい交流と団欒は心に残るものとなった。

- iv) 企画運営に携わった学生たちの自主的な行動によって、留学生や在住外国人青年とのコミュニケーションが円滑に進められるという体験を通して、国際的に相互の友好と理解が図られた。このような企画と交流を契機として、地域に住む外国人の諸問題にも関心を持ち、学生たちの視野と活動範囲も広がるのではないかと期待される。

3-3. 感想、意見等

① 日本人学生の感想：実行委員2名

この事業を通して日本人学生、留学生、在住外国人という大きく分けて3つの立場にある人々が交流できたことは非常に有意義であったと思われる。

一日目では、同じ大学内にいながら普段なじみの少ない日本人学生と留学生が共通の作業やレクリエーションを行う事によって、国の違いを超えて同世代の考え方や価値観を共有することができた。また、歴史的文化財である忍者屋敷や上野城を見学・散策する事を通して、留学生は異なる文化にふれる事ができ、一方で日本人学生は自国の文化・歴史に対する認識を改めることができた。

2日目では、在住外国人という、国は当然のことながら、生活環境や世代の異なる立場の人々を交え、座談会、フォルクローレ演奏会など、各国または各個人の個性が引き出される催しを共に体験した事は、これからの人生において新しい考え方・視点を投げかけるものであったと思われる。また、2日目の国際交流においては中日新聞社、伊賀上野ケーブルテレビの2社による取材・撮影も行われ、メディアを通しての話題性も備えた事業となり主催者側としては正に感無量の満足感を得られたと感じている。

長田真太郎（生物資源学部3年）

伊賀研修で交流会の食事の準備を担当した。食事を計画するに当たって大変だったことは、外国人の方の宗教などを考えないといけないことだった。日本人だけで食事をするときは、好き嫌いは別として食べることでできないものはほとんどない。しかし、今回の交流会に参加していただいた外国人の方たちの中には宗教上の理由で食べられない食品があり、この食品を抜いた料理を考えることが大変だった。今回、私はどちらかというと裏方で、ディスカッションや各国の発表に参加することができなかったが、準備の段階から参加でき、とても良い経験となった。

村田 佳美（生物資源学部2年）

② 参加者へのアンケートから（抜粋）

● ショートスピーチ「日本と母国の違い」（M＝三重大学生、I＝伊賀からの参加者）

○外国人参加者

- ・国によって文化や習慣などが違う。ほかの国の方からいろいろなことを知らせていただいて本当に勉強になった。M
- ・ショートスピーチによって新しい色々なことを習った。みんな頑張っていた。しかし、私にとってスピーチが大変だった。でもその後はうれしかった。M
- ・8カ国の代表から色々な母国のことを教えてもらった。特に各国の特産物・料理の話がおもしろかった。M
- ・ちょっとだけだが、色々な国についておいしい料理やどんな言葉で話しているか、など教えてもらってほんとに勉強になった。M
- ・かなり難しかったと思うが、おもしろかった。M
- ・ほかの国のことも聞けて楽しかった。I
- ・他の人のお話はすごく面白かったけど、スリランカとフランスの話が聞けなかった。残念。I
- ・当日に頼まれて、ちょっと少し困ったけど、良かった。I
- ・楽しかった。他の国の文化を知ることができたのでとてもよかった。I

○日本人参加者

- ・違いというよりは母国の紹介が多かった気がするが、他国の食文化、生活習慣、気候などを耳にすることができて海外での生活に慣れることの難しさ、楽しさを感じられた気がする。M
- ・クリスマスやお正月。それぞれの国のおもしろい話が聞けて楽しかった。M
- ・皆さんが母国についてとても誇りを持っていることが窺えた。様々な文化や日本との違いについて知れてよかった。I

● グループ別話し合い

○外国人参加者

- ・自分の国のことを紹介したり自分が知りたいことを他人にきいていただき、国と国の関係が深くなってきたと思う。M
- ・私は日本語があまり得意ではないが、友達が助けてくれたのでほかの国の人との話し合いがうまくいった。M

- ・とても楽しかった。グループ別の話によって日本人と外国人の生活についてよく勉強した。みんなとても優しくて面白いと思う。でも、今度は日本人のグループリーダーを前に決めておくべきだと思う。M
- ・There are different kind of people from many countries. It was very interesting to talk with them. たくさんの国からきたいろんな人がいて、話をするのがとても面白かった。M
- ・来日後のカルチャーショックのことを話できた。それからクリスマスのことも話できて楽しかった。M
- ・日本人と、特にかしこまることもなく、話ができることがよかった。I
- ・maybe prepare a game in advance. But it was good to talk with people from different countries, 前もってゲームを用意しておけばよかったかもしれない。でいろいろな国から来た人々と話せてよかった。I
- ・みんなと話して国が違えけれど考え方がにてるなと思った。I
- ・Very interesting. It was good to get a chance to find out more about the other people here. I enjoyed this session very much. 非常におもしろかった。ここににいる人々についてもっと知る機会があったことがよかった。この話し合いはとても楽しかった。I

○日本人参加者

- ・外国人の日本語のレベルが違って、皆が理解して話し合うことが難しかった。M
- ・話し合う項目がいくつかあったので、話しやすかった。M
- ・人数も◎、男女比も◎、国種も◎、話がとぎれたら「テーマ」を使えたので◎、めっちゃ楽しかったよ！M
- ・私のグループでは、皆が話し合いに参加できる雰囲気を持つことができた。お互い質問し合い、私たちが当たり前だと思っていることが、外国人には驚きであることを改めて気づかされた。M

●演奏と昼食交流会

○外国人参加者

- ・演奏は非常にすばらしいと思う。皆で歌を歌いながら踊っていた時、皆本当の兄弟だと思った。昼食交流会も良かった。料理もおいしかったし、個人的な話もできたし、友達を作ることはそんなに難しくないことだと感じる。M

- ペルーの音楽はあまり知らないけれど今日の演奏はとても楽しいと思った。昼食がおいしかった。M
- いろいろな国の人と交流できるのはすばらしい経験になると思った。また、自分が行ったことがない国の文化を楽しむ事ができてうれしかった。おいしい料理をいっぱい作ってくれたみなさまありがとう。M
- 美しいフォルクローレの演奏を聴きながらみんな一緒にダンスをしたり、歌を歌ったり昼食を食べたり国境を越えてみんなが友達だと感じる。M
- 演奏の時、みんなが踊ったりしたときは、仲良くなれたようでよかった。I
- Sushi-oishikatta The music was amazing! I
- The food was very good. Maybe there were too many sandwiches! I really enjoyed the music from Peru. 料理はとてもおいしかった。サンドイッチが多すぎたかもしれないけれど！ペルーの音楽は本当に楽しかった。I

○日本人参加者

- フォルクローレはとてもよかった。みんなで踊ってすごく楽しかった。昼食はすしよりみんなブラジル料理に夢中だった（と思う）。おいしいけど、すぐにおなかがいっぱいになってしまったのが残念(?) などところ。M
- とても心地よい音色に、踊りだしたくなるようなリズムは最高だった。踊ることにより、心も体もほぐれたのでは。交流会はサンドイッチが多すぎたと思う。M
- サンドイッチが多かった。パン耳の実演販売できなかったことが心残り。M
- 50人分の量が分からなくて困った。ちょっと作りすぎた…M
- 演奏はとってもよかった。一緒に歌ったり、踊ったり皆で参加できたのが楽しかった。昼食は、次にこういう機会があったら、外国の人達と作ってもいいと思う。M
- 演奏は皆で踊りながら交流できて、思ってたよりも盛り上がったと思う。演奏もノリがよくて、全員が踊りに参加できて楽しめたことがよかった。I
- ダンスがとても楽しかった。ペルーの方の演奏もステキで、ポンチョもかわいかった。I

4. おわりに—自然な異文化体験を未来に

以上が学生が主体となった2つの事業のまとめである。

伊勢においては事前に地元外国人支援ボランティアと連携を取り、JICA 中部と三重県主催事業に学生が参加した。外国人参加を望む地元の要請に留学生が応じ地元の外国人住

民とともに交流や理解を深めた。また伊勢神宮参観では、実行委員がガイドボランティア3名（1名は英語での説明）を依頼し、当日は留学生と共に神宮の歴史、建造物や施設などの由来を改めて学んだ。当日三重大学から参加した24名の留学生のうち22名が中国人となり、参加国籍の面で1つの課題を残した。またJICAのイベントのほとんどが普通の速度の日本語のみで進められていたことから、「もう少しゆっくり話してほしかった」という正直な意見もあり、内容をよく理解できない外国人参加者が（地元参加者も含め）一定程度いたのではないかと思われた。もっとも、外国人参加を募るイベントでは日本語が堪能でない人がある程度集まるのは自然なことであり、参加者の問題というより企画運営上の問題といえる。その他、参加者の感想には、「伊勢神宮での時間が足りなかった」「JICA イベントでもっといろいろな人と話し合いたかった」など考慮すべき反省点も見られる。しかし、「日本の文化に触れられた」「日本の援助活動が理解できた」「発表者の話に感動した」などの意見から、概して、伊勢神宮、おかげ横丁、イベントで体験した日本の文化、国際的な支援活動報告など、異なった種類の新鮮な知識を得られたことが評価されるのではないかと思われる。

伊賀でのイベントは、経緯に見るように、実行委員の学生が伊賀のボランティア、外国人の若者と何度も緻密な話し合いを重ねながらゼロから組み立てた事業である。津からと伊賀からの参加者はほぼ同数で、計11カ国44名（教員省く）が参加。多国籍、多職種の若者が集い、内容的にも独創的でユニークな事業となった。1日目の城下町の歴史探訪、忍者屋敷の体験、日本語ボランティア教室での多くの在住外国人との触れ合い、銭湯の体験なども、留学生だけでなく日本人学生にとっても新鮮な経験であったようだ。交流イベントに関しては国別「ショートスピーチ」の予定であったが、各発表者が質問攻めに合い、いずれも「ロングスピーチ」となり、時間切れで2カ国の紹介が出来なかった。この点は感想にも「時間が短すぎた」「全部の国の話を聞きたかった」などに現れている。グループ別話し合い、フォルクローレを聞きながら食事・交流会は概して好評で、時間的にも打ち解け、会場のあちこちで様々な組み合わせの輪ができ、日本語、英語、フランス語、中国語、スペイン語が飛び交い、思い思いに語り合っていた。行事としては基本的には日本語をベースに進行し、実際、日本語の堪能な外国人が圧倒的に多かったが、感想の中にあるように、日本語レベルの違いによって、理解の差が生まれたり誤解があったりした場面も見られたように思う。参加した日本人学生にも中国語や英語に堪能なものが数人いて、個人的な交流の時間では彼らの積極的な活躍が見られた。

大学の国際交流基金の対象事業としてだけとらえれば、学生主体の企画は教員などのそれに比べ、理論的にも計画内容も一見稚拙な感は否めない。しかし、彼ら自身がこのよう

に企画し実行していく過程で、当初の教員などの予想を大きく超えた意味と発見が加わってくる。長期的に見ればこのような学生の国際交流活動へのサポートも継続的に必要ではないだろうか。その意味で学生の企画に対する国際交流基金助成の継続が強く望まれる。

「自分たちで作り上げることができた」「話が聞けてよかった」「違いを乗り越えられると思った」「これからもこのような活動に参加したい」など2つの行事を通じて未来志向の感想が多いのは、若者として自然なことである。教員など大人の視点以上に成長期の若者の視点は新鮮で意義深いものがある。国籍を問わず未来型の異文化間理解と交流の意味を体感し、成長と共に優れた国際感覚を養ってくれることを期待したい。

注

- (1) 文中それぞれの所属学部、学年などは行事の時点のものを記載した。
- (2) ペルーなど南米アンデス地方を中心に古くから伝わる民族音楽。ケーナ、チャランゴ、サンポーニャなど独特の楽器で演奏される。「コンドルは飛んでいく」「花祭り」などが有名。当日は伊賀市内のペルー人6名と日本人1名による「ワウヘミカンキ」がこのイベントのため特別参加し名曲を披露してくれた。改めてこの稿を借り感謝の意を表したい。

参考文献

- 福岡昌子・藤本久司・別府直苗（2004）「全学部を対象とした「日本語学習サポート」の取り組み」『三重大学留学生センター紀要第6号』pp. 125－137.
- 福岡昌子・藤本久司・別府直苗（2004）「全学部を対象とした「日本語学習サポート」の取り組み」『2004年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 209－210.
- 福岡昌子・藤本久司・別府直苗（2005）「日本語学習サポートにおける活動意識に関する研究－日本人学生と留学生－」『三重大学留学生センター紀要第7号』pp. 49－67.